

聴覚障害の臨床と聴覚心理学*

○竹内京子（順天堂大）、青木直史（北大）、荒井隆行（上智大）、△鈴木恵子（北里大）、
世木秀明（千葉工大）、△秦若菜（北里大）、安啓一（筑波技術大）

1 はじめに

言語聴覚士は、ことばのリハビリを行う職業である。その対象領域はとても広い。その養成校では、聴覚心理学が必修科目となっている。しかしながら、先行研究の現役言語聴覚士対象のアンケートによると、聴覚心理学の授業内容の記憶がほとんどなく、聴覚検査、補聴器・人工内耳の調整のような聴覚障害の臨床に関係ある授業との関わりが分からないという声が多かった。[1] 本発表では、ほぼ同じ内容のアンケートを別集団の現役言語聴覚士に行った。両者の結果を比較し、報告する。

2 聴覚心理学の印象（先行研究）

2.1 学生時代好きだったか？

現役言語聴覚士対象に「STのための音響学」という講習会[2]を2021年3月から開催している。第5回の講習会で20名の現役言語聴覚士に実施したアンケート[1]によると、「**学生時代、聴覚検査実習は好きでしたか？**」という質問に、好き(1) 嫌い(5)の5段階で答えてもらった。結果は、(1)3名(2)5名(3)8名(4)2名(5)2名であった。また、「**学生時代、補聴器・人工内耳の授業は好きでしたか？**」という質問に対しては、(1)2名(2)1名(3)5名(4)6名(5)6名であった。

2.2 聴覚障害の臨床とは関係ない

さらに、「**学生時代、音響学・聴覚心理学の授業と聴覚検査、補聴器・人工内耳の授業とのつながりで気づいたことはありましたか？**」に対して、いいえ(15名) はい(5名)であった。多くの参加者が「いいえ」と回答するという結果となり、聴覚心理学の教師側が目指しているものとの大きな違いが明らかになった。

3 聴覚心理学の印象（今回の調査）

3.1 調査の概要

今回の調査を行った「第14回 STのための音響学」の講習会は、テーマが「聴覚心理学」であった。講習会の参加申し込み時のアンケートで、現役言語聴覚士33名に、前述の先行研究とほぼ同じである以下の質問をした。

3.2 学生時代好きだったか？

まず、嫌い(1) 好き(5)の5段階で、以下の質問をした。その結果、**養成校時代、**

1) 「聴覚検査実習は好きでしたか？」

(1)1名(2)1名(3)10名(4)13名(5)8名

2) 「補聴器の授業は好きでしたか？」

(1)2名(2)4名(3)12名(4)7名(5)8名

3) 「人工内耳の授業は好きでしたか？」

(1)1名(2)3名(3)14名(4)3名(5)5名であった。

聴覚検査実習はどちらかと言うと「好き」に傾き、補聴器、人工内耳の授業は好きでも嫌いでもなく、どちらでもないという回答が多かった。

3.3 聴覚検査・補聴器・人工内耳との関係

さらに、聴覚検査、補聴器、人工内耳の授業と聴覚心理学の授業との関係を質問した。そして、以下のような結果が得られた。

1) 「**聴覚検査実習と聴覚心理学の授業は関係があると思いませんか？**」には、はい(29名)、いいえ(4名)。

2) 「**補聴器の授業と聴覚心理学は関係あると思いませんか？**」には、はい(27名)、いいえ(6名)。

3) 「**人工内耳の授業と聴覚心理学は関係あると思いませんか？**」には、はい(28名)、いいえ(5名)であった。

先行研究の第5回の講習会とは違い、聴覚

*Hearing Impairment Clinical and Auditory psychology, by TAKEUCHI, Kyoko (Juntendo University), AOKI, Naofumi (Hokkaido University), ARAI, Takayuki (Sophia University), SUZUKI, Keiko・HATA Wakana (Kitasato University), SEKI, Hideaki (Chiba Institut of Technology) and YASU, Keiichi (Tsukuba University of Technology).

心理学と聴覚障害の臨床との関係を考えている者が多いという結果が出た。

3.4 何を習ったか？

しかしながら、同じアンケートで、「聴覚心理学の授業で何を習いましたか？」との質問には、「あまりよく覚えてない」と回答する者も多かった。「音の大きさと高さの感覚値、マスキング、騒音、ドップラー現象やカクテルパーティー現象」「音の感じ方の要素、mel、sonе など」「両耳聴効果、聴覚フィルタ、ミッシングファンダメンタルなど」と学習項目を列挙した者もいたが、「聴覚に関する様々な授業がありどの内容が聴覚心理学であったか不明です。」と聴覚検査や音響学の内容など、複数科目の境界が分からない者が多くみられた。聴覚心理学自体が何であるかを知らないで、講習会でその内容を知りたいという回答も多かった。

4 2 調査の比較

4.1 好きな科目・嫌いな科目

2 調査のそれぞれの科目の「好き」「嫌い」の比較を行うと、聴覚検査実習は、両調査ともやや「好き」の傾向がある。補聴器、人工内耳の授業は、前回は「嫌い」に偏っていたが、今回は、どちらでもなく、中央の3に集まる傾向があった。

4.2 聴覚心理学と関係あるか？

「聴覚心理学」の授業と関係があるか？については、前回の調査と比較して、今回の調査では、聴覚検査、補聴器・人工内耳の授業と聴覚心理学の授業との関係があると答えた者がとても多かった。これらの原因は、第5回の講習会のテーマは音響分析ソフトの使い方であり、第14回のテーマは聴覚心理学である。それゆえ、同じ現役言語聴覚士でも、参加者の集団が異なる可能性がある。

5 おわりに

本発表では、言語聴覚士の「聴覚障害の臨床」と「聴覚心理学」との関係を実験言語聴覚士がどのように捉えているかについて調査し、過去の先行研究の結果と比較した。その結果、今回の調査では、聴覚障害の臨床と聴

覚心理学の関係があると考える者が多かった。さらに、今回の参加者の回答では、聴覚障害関連の科目がはっきりと好きという訳ではないが、嫌いではない集団であった。

現在、日本全国の言語聴覚士の数は約38000人である。そのうち、「STのための音響学」の講習会に興味を持ち、参加して下さり、調査に協力して下さった方々は、ほんの僅かではない。それを考えると、今回の調査の参加者の回答は例外で、どちらかかという、前調査の内容の方が現状を反映しているのかもしれない。

ただし、今回の調査の収穫として、「聴覚障害の臨床」に興味のある集団には、「聴覚心理学」との関わりが見えるという可能性が示唆された。この点が、今後の変化の糸口になることを期待したい。

6 今後の課題

今後は、言語聴覚士に対して、「聴覚心理学」の啓蒙活動を行うとともに、同じ調査の結果がどのように変化していくか、同時に、聴覚障害の臨床に対する印象がどのように変わるかを調べていきたい。さらに、両者の相乗効果により、よりよい授業ができる方法を探求していきたい。

謝辞

本発表は、言語聴覚士養成課程における「音響学教育」の現状調査と授業ガイドライン、教材作成（科研費番号 20K03074）と声道模型を中心とした音響学・音声科学の教育とICTの融合（科研費番号 21K02889）の成果である。また、「第8回 STのための音響学」は、日本音響学会 音響教育委員会、日本音声学会、東京都言語聴覚士会が後援していただいたことに感謝する。

参考文献

[1] 竹内京子, 青木直史, 荒井隆行, 鈴木恵子, 世木秀明, 秦若菜, 安啓一, 音響学は聴覚検査と関係あるのか? 日本音響学会研究発表会講演論文集 CD-ROM, 2022

[2] 本科研費・「STのための音響学」のHP <https://sites.google.com/view/stonkyo>